

日常生活における演技についての探索的研究

筑波大学大学院人間総合科学研究科 定廣 英典

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 望月 聡

An explorative study concerning acting in daily life

Hidenori Sadahiro (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Satoshi Mochizuki (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

We often experience a sense of "acting" within social interactions. However, there have been few studies concerning "acting". Accordingly, the purpose of this study is to investigate the nature of acting within daily life. Eighty-five undergraduates completed a questionnaire concerning frequencies and descriptions of their own experiences of acting. The results indicated that approximately 90 percent of the undergraduates regarded acting to be necessary. The descriptions of acting were classified according to the KJ method. The results of the third type of quantification method indicate that acting is interpreted in terms of three patterns; namely, conspicuous acting to form new relations, inconspicuous acting to maintain relations, and acting for self-interest and profit. Acting is argued to involve the two motivations of 'acquisition' and 'protection'.

Key words: acting in daily life, self presentation, dramaturgical approach, histrionic self presentation

問題と目的

日常生活において、相手に応じて自分を変化させたとき、変化させた行動を「演技」と感じることもある。演技が広く行われているならば、演技について検討することで、対人場面における個人の行動について新たな視点から捉えることが可能だと考えられる。こうした演技に関連のある研究として、Goffmanの「行為と演技」(1959 石黒訳 1974)における自己呈示の演劇論的アプローチ、そしてRenner, Enz, Friedel, Merzbacher & Laux(2008)の演技的自己呈示がある。

Goffman(1959)は「行為と演技」の中で、自己呈示をパフォーマンス、自己呈示を行う者をパフォーマー、それを受け取るものをオーディエンスと表現した他、舞台装置、演出といった舞台で用いられる言語を用いた演劇論的アプローチによっ

て、日常生活の自己呈示を説明している。しかしこうした表現を用いたことについてGoffman(1959)は、これらは単なるアナロジーに過ぎず、真面目に受け取りすぎるものではないと述べている。おそらくこうした注意がされている理由は、あらゆる対人行動が演技的で、作為的なものであるととらえられることに注意を促したためと考えられる。Goffman(1959)が「行為と演技」の中で研究の対象としたものは非常に幅広く、例えば「行為と演技」については、その冒頭でこう述べられている。「私は社会生活—とくに一つの建物、あるいは施設のような物理的境界をもったところで組織されている型の社会生活—が研究されるときに用いられる一つの社会学的視角を詳細に記した一種の便覧として、役に立つようにと願っている」。こうした一定の枠の中で生じるあらゆる対人行動において、個人が作為的に策を練って対人行動をしているとGoffman(1959)は

述べている訳ではなく、その行動を説明するために演劇論的アプローチが有効なために、それをを用いたのである。Goffman (1959) の主な興味は対人関係において、どのような相互行為が人びとの間で行われるかであり、そのとき、パフォーマーがそれを作爲的に行ったのか、演技として行ったのかは、主な関心事ではない。ここでパフォーマー個人に目を向けると、自己呈示においては呈示者が自己の呈示について気付いていることも気付いていないこともあると指摘されており (Goffman, 1959; Schlenker, 2003), パフォーマーにとってはある行動を演技と捉えることも、捉えないこともありうる。しかし、こういった行動が演技と捉えられやすいのかについて検討している研究はない。

演技を別の側面から取り扱った研究として Renner et al. (2008) の演技的自己呈示の研究がある。Renner et al. (2008) によると演技的自己呈示とは、例えば映画の主人公になりきって他者の前で披露するときのように、あたかも自分とは違う何かの役のように振る舞う「あたかも行動 (As If Behaviors)」によって、その場の状況を「劇的なシーン」に変えてしまうことである。演技的自己呈示は「明らかにパフォーマティブな特質をもった短期間のロールプレイ」という点で、Goffman (1959) の演技の概念とは異なっていると Renner et al. (2008) は指摘している。演技的自己呈示とは、誰が見てもそれは演技だとはっきり分かる形でロールプレイがなされている状態を指すため、Goffman (1959) に比べて、限定された意味として定義づけられているということである。しかし演技としてイメージされる行動の中に Goffman (1959) が対象としたような日常生活の対人行動が含まれるならば、このような限定された意味のみだとその実態を把握しきれない可能性があるだろう。

演技と認識される行動は多く行われていると考えられるが、実際にどの程度演技がなされているかについて調査した研究はない。そこで本研究では、第1に演技の実行の程度について調査し、日常生活において演技が行われる程度を明らかにすること、第2にどのような対人行動が演技として捉えられているのかについても探索的に検討することを目的とした。

本研究を実施するにあたって演技について「演じることによって自分を変化させ、変化させた自分を相手にみせること」と定義した。これには演じることと、自己の変化、変化を他者に見せることという3つの要素を含んでいる。演じることによって、自分の他者への表出を変化させたという認識は演技に

必須であり、日常生活の演技を対象とするためには、他者が存在する場面を対象とする必要があると考えたためである。

方 法

被調査者 大学生・大学院生 85名 (男性 52名, 女性 32名, 不明 1名; 平均年齢 20.64歳, $SD = 1.53$)。

調査時期 2006年9月から11月

質問紙の構成 フェイスシートにて、「日常生活での演技」について「演じることによって自分を変化させ、変化させた自分を相手にみせること」と説明し、質問への回答を求めた。性別、年齢の記入を求めた後、演技頻度や、演技の必要性について (A1: あなたは自分が日常生活において演技をしていると思いますか), (A2: あなたは他の人が日常生活において演技をしていると思いますか), (A3: あなたは日常生活で演技をすることは必要だと思いますか) の3項目について“思わない”から“思う”までの4件法でたずねた。またA3に対しては、なぜ必要 (あるいは必要ではない) と思ったかを記述するよう求めた。次に具体的な演技の実態について調査するため、実際に自分、もしくは他人が演技をしていたと思う様子について、まず (B1: 演技をしていた場面 (演技場面)) をたずねた。一つの演技について様々な角度から理解するために、回答してもらったそれぞれの場面について、(B2: どのような演技をしていたか (演技行動)), (B3: 演技によってどのような効果があったか (演技効果)), (B4: どのような動機、理由で演技をしていたか (演技動機)) を自由記述式でたずねた。

自由記述の分類、検討 本調査で得られた自由記述の回答は、心理学を専攻する大学院生3人によってKJ法を用いて分類、検討された。その際、1つの回答の中に複数の内容が含まれていた場合、それぞれを分割し、別の内容として扱った。また以下の記述ではいずれのカテゴリにも含まれなかった回答は省略した。

結 果

演技頻度と演技の必要性

A1では“少し思う”、“思う”と答えた者を合わせると61名 (71.8%), A2では67名 (78.8%), A3では77名 (90.6%) であった。

A3の理由について言及した76の自由記述から、13の小カテゴリ、6の大カテゴリを形成した (Table 1)。以降、【 】は大カテゴリを、『 』は中カテゴリ

Table 1 「演技が必要な理由」自由記述分類結果

大カテゴリー	出現率(%)	小カテゴリー	具体的項目	反応数
他者要因	47.37	人間関係円滑化	その方が人間関係が円滑に進むため	18
		衝突回避	他人との衝突を避けるため	6
		人間関係保持	素のままで生活すると、人間関係が上手くいかない気がするため	5
		他者への配慮	相手を傷つけないため	5
		状況を盛り上げる	その場を盛り上げたり楽しんだりするため	2
状況対応	18.42	状況対応	その場の環境に合わせて、自分の印象などを変える必要があるため	14
自己要因	13.16	自己隠蔽	自分の本質を見られたくないため	5
		好印象呈示	自分を良く見せるため	3
		自己成長	自分の見方が変わってくるため	1
		自己防衛	自分を傷つけないため	1
社会適応	11.84	社会適応	その方が物事がうまくいく事が多いため	9
演技不要	5.26	演技不要	しなくても困らないため	4
理由無し	3.95	理由無し	なんとなく	3

りを、「」は小カテゴリーを示している。

【他者要因】は36(47.37%)の回答が該当した。他者との関係のために演技が必要という理由だった。【他者要因】は「人間関係円滑化」、「衝突回避」、「人間関係保持」、「他者への配慮」、「状況を盛り上げる」から形成されていた。【状況対応】は14(18.42%)の回答が該当した。その場その場の状況や、自分の役割に応じるために演技が必要と考えた反応であった。【自己要因】は10(13.16%)の回答が該当した。自分のために演技が必要と考えた反応であった。【自己要因】は、「自己隠蔽」、「好印象呈示」、「自己成長」、「自己防衛」から形成されていた。【社会適応】は9(11.84%)の回答が該当した。社会で生きていくためには演技が必要と考えた反応であった。【演技不要】は4(5.26%)の回答が該当した。演技は必要ないと考えた反応であった。【理由無し】は3(3.95%)の回答が該当した。特に理由はないが、演技は必要だと考えた反応であった。

演技内容の分析

分析においては場面、行動、効果、動機のいずれか1つでも回答が見られた場合、分析の対象として扱った。その結果、195の演技内容に関する回答が集まった。

演技場面 自分、もしくは他人が演技をしていたと思われる場面について、78名の回答者から得られた170の回答を、27の小カテゴリー、10の中カテゴリー、4の大カテゴリーに分類した(Table 2)。

【他者】は82(48.24%)の回答が該当した。このカテゴリーは演技をした場面として、特定の他者と接するときを挙げた反応であり、『上下関係』、『親密でない相手』、『異性』、『親密な相手』の4つの中カ

テゴリーから形成されていた。『上下関係』は、上下関係のある相手と接するときを挙げた反応であり、「先生」、「先輩・上司」、「目上の人」、「後輩」から形成されていた。『親密でない相手』は、仲があまり良くない相手と接するときを挙げた反応であり、「初対面」、「嫌い・苦手な相手」、「疎遠な相手」から形成されていた。『異性』は、異性と接するときを挙げた反応であり、「好きな異性」、「異性全般」から形成されていた。『親密な相手』は親しい人と接するときを挙げた反応であり、「親しい人」、「親」から形成されていた。

【状況】は62(36.47%)の回答が該当した。このカテゴリーは演技をした場面として特定の状況を挙げた反応であり、『社会的場面』、『衝突危機場面』、『集団配慮場面』の3つの中カテゴリーから形成されていた。『社会的場面』は、不特定多数の相手と接する機会のある社会的な場面を挙げた反応であり、「アルバイト」、「就職活動」、「発表」、「電話」から形成されていた。『衝突危機場面』は相手と何らかの衝突が起きそうなきを挙げた反応であり、「興味無し、わからない」、「怒り喚起」、「意見相違」、「他者侵害危機」から形成されていた。『集団配慮場面』は集団全体のことを考慮しているときを挙げた反応であり、「賑やか」「集団行動」「リーダー」から形成されていた。

【自己】は20(11.76%)の回答が該当した。このカテゴリーは自分の状態をその要因として挙げた反応であり、『ネガティブ状態』、『特定印象呈示』から形成されていた。『ネガティブ状態』は演技をする場面として、自分の状態がネガティブなきを挙げた反応であり、「落ち込んでいる時」、「反省を求められている時」から形成されていた。『特定印象呈示』

Table 2 「演技場面」自由記述分類結果

大カテゴリ	中カテゴリ	出現率 (%)	小カテゴリ	反応数
他者	上下関係	17.7	先生	10
			先輩・上司	8
			目上の人	8
			後輩	4
	親密でない相手	14.1	初対面	10
			嫌い・苦手な相手	9
			疎遠な相手	5
	異性	12.4	好きな異性	12
			異性全般	9
	親密な相手	4.1	親しい人	5
親			2	
状況	社会的場面	15.9	アルバイト	14
			就職活動	7
			発表	4
			電話	2
	衝突危機場面	13.5	興味なし・わからない	11
			怒り喚起	4
			意見相違	4
			他者侵害危機	4
	集団配慮場面	7.1	賑やか	5
			集団行動	5
リーダー			2	
ネガティブ状態	7.7	落ち込み	7	
		反省	6	
		特定印象呈示	4.1	
自己	特定印象呈示	4.1	嘘・仮病	5
			好意的印象	2
全般的	全般的	3.5	全般的	6

は演技をする場面として、相手に対して特定の印象を与えたいと思ったときを挙げた反応であり、「嘘・仮病」、「好意的印象」から形成されていた。

【全般的】は演技を全般的にしているという反応であった。

演技行動 自分、もしくは他人がどのような演技をしていたかについて、79名より得た175の自由記述回答から30の小カテゴリ、9つの中カテゴリ、5つの大カテゴリに分類した (Table 3)。

【同調】は70 (40.00%) の回答が該当した。このカテゴリは相手を刺激しないよう相手に合わせるような演技をしたという反応であり、『好意的反応』、『感情操作』から形成されていた。『好意的反応』は相手に対して好意的な反応を返すという演技であり、「笑顔」、「意見同調」、「興味あるふり」、「聞いているふり」、「反省しているふり」、「笑い反応」、「楽しそうなふり」、「分かっているふり」から形成されていた。『感情操作』は、自分の感情をそのまま表

出せずに、ごまかして反応するという演技であり、「気にしないふり」、「さりげないふり」、「感情抑制」から形成されていた。

【ポジティブ印象】は65 (37.14%) の回答が該当した。このカテゴリは相手にポジティブな印象を与えるような演技をしたという反応であり、『ポジティブ印象』、『ポジティブ印象関連行動』から形成されていた。『ポジティブ印象』は、相手にポジティブな印象を与えるような演技をしたという反応であり、「好印象」、「丁寧・礼儀正しい」、「いい人」、「明るい・気さく」、「かわいい」、「まじめ」、「優しい・おだやか」、「すごい」から形成されていた。『ポジティブ印象関連行動』はポジティブな印象を形成するのに寄与するような演技をしたという反応であり、「すごさを示す行動」、「規範遵守」から形成されていた。

【ネガティブ印象】は15 (8.57%) の回答が該当した。このカテゴリは他者にネガティブに受け止められる可能性のある演技をしたという反応であり、

Table 3 「演技行動」自由記述分類結果

大カテゴリ	中カテゴリ	出現率 (%)	小カテゴリ	反応数		
同調	好意的反応	31.4	笑顔	12		
			意見同調	9		
			興味あるふり	8		
			聞いているふり	6		
			反省しているふり	6		
			笑い反応	5		
			楽しそうなふり	5		
			分かっているふり	4		
			感情操作	8.6	気にしないふり	6
					さりげないふり	6
感情抑制	3					
ポジティブ印象	ポジティブ印象	30.9	好印象	10		
			丁寧・礼儀正しい	8		
			いい人	8		
			明るい・気さく	7		
			かわいい	7		
			まじめ	6		
			優しい・穏やか	5		
			すごい	3		
			ポジティブ印象関連行動	6.3	すごさを示す行動	8
					規範遵守	3
ネガティブ印象	弱く見せる	7.4	怪我・病気のふり	7		
			知らないふり	4		
			だめなふり	2		
ニュートラル印象	厳格	1.1	厳格	2		
			役割	5.7	役割	10
					ニュートラル印象	2.9
			酔っているふり	3		
演技の仕方	演技の仕方	5.7	大げさな演技	5		
			口調・ジェスチャー	5		

『弱く見せる』、『厳格』から形成されていた。『弱く見せる』は他者に自分が弱く受け止められるような演技をしたという反応であり、「怪我・病気のふり」、「知らないふり」、「だめなふり」から形成されていた。『厳格』は、他者に脅威的に受け止められるような厳しい演技をしたという反応であった。

【ニュートラル印象】は15(8.57%)の回答が該当した。このカテゴリはポジティブとも、ネガティブともいえない、何らかの印象を得るような演技をしたという反応であり、『役割』、『ニュートラル印象』から形成されていた。『役割』は、その場の役割に合った演技をしたという反応であった。『ニュートラル印象』はポジティブともネガティブとも言えない特定の印象を得るような演技をしたという反応であり、「無難」、「酔っているふり」から形成され

ていた。

【演技の仕方】は具体的な演技の方略について述べた反応であり、「大げさな演技」、「口調・ジェスチャー」から形成された。

演技効果 自分、もしくは他人が演技によってどのような効果があったと思うかについて得た166の自由記述回答をから29の小カテゴリ、7つの中カテゴリ、4つの大カテゴリに分類した(Table 4)。

【関係維持】は69(41.57%)の回答が該当した。このカテゴリは他者との関係を維持、もしくは悪化させないで済んだという効果であり、『他者損害回避』、『集団への効果』から形成されていた。『他者損害回避』は、他者とぶつかったり、どちらかが傷つくことを回避できたという効果であり、「衝突回避」、「他者への配慮」、「他者の配慮への遠慮」、「他

者を良い気分にする」,「嫌われない」,「嫌悪感隠蔽」から形成されていた。『集団への効果』は集団に効果を与えたり,集団でうまくやっていけたりできたという効果であり,「雰囲気維持」,「集団調和」,「盛り上がる」,「集団がまとまる」,「円滑」から形成されていた。

【関係獲得】は61(36.75%)の回答が該当した。このカテゴリは良い印象を与えたり,親密になれたりしたという効果であり,『ポジティブ印象』,『親密化』から形成されていた。『ポジティブ印象』は相手にポジティブな印象を与えたという効果であり,「好印象」,「いい人」,「明るい・面白い人」,「まじめ・しっかり」,「賢い」,「魅力的」から形成されていた。『親密化』は相手と仲良くなったという効果であり,「好かれる」,「親密性上昇」,「打ち解ける」

から形成されていた。

【利益】は30(18.07%)の回答が該当した。このカテゴリは何らかの利益を得ることができたという効果であり,『直接的利益』,『良い扱い』から形成されていた。『直接的利益』は演技をすることによって直接何らかの利益を得ることができたという効果であった。「話を打ち切る」,「隠蔽」,「就職への利益」,「体面維持」,「学業面への利益」,「休む」から形成されていた。『良い扱い』は演技をすることによって他者から良い扱いをされたという効果であった。このカテゴリは「他者からの厚遇」,「他者からの配慮」から形成された。

【逆効果】は演技をすることが逆効果であったという反応であった。

演技動機 自分,もしくは他人がどのような動機

Table 4 「演技効果」自由記述分類結果

大カテゴリ	中カテゴリ	出現率	小カテゴリ	反応数
関係維持	他者損害回避	27.1	衝突回避	13
			他者への配慮	13
			他者の配慮への遠慮	5
			他者を良い気分にする	5
			嫌われない	5
	集団への効果	14.5	嫌悪感隠蔽	4
			雰囲気維持	8
			集団調和	6
			盛り上がる	4
			集団がまとまる	3
関係獲得	ポジティブ印象	22.3	円滑	3
			好印象	14
			いい人	6
			明るい・面白い人	6
			まじめ・しっかり	4
	親密化	14.5	賢い	4
			魅力的	3
			好かれる	11
			親密性上昇	10
			打ち解ける	3
利益	直接的利益	14.5	話打ち切る	5
			隠蔽	5
			就職への利益	4
			体面維持	4
			学業面への利益	3
	良い扱い	3.6	休む	3
			他者からの厚遇	3
逆効果	逆効果	3.6	他者からの配慮	3
			逆効果	6

で演技を行ったと思うかについて得た 191 の自由記述回答から、33 の小カテゴリ、11 の中カテゴリ、6 の大カテゴリに分類した (Table 5)。【関係維持】は 79 (41.36%) の回答が該当した。これは相手との関係を維持したい、悪化させたくないといった反応であり、『集団』、『規範』、『他者損害回避』から形成されていた。『集団』は、人間関係全般や、その場のために演技をしたという反応であり、「円滑」、「集団所属」、「雰囲気維持」、「和ませる」、「楽しくする」から形成されていた。『規範』は常識や役割、ルールなどのために演技をしたという反応であり、「仕事・役割」、「常識的な気遣い」、「社会のルー

ル」から形成されていた。『他者損害回避』は他者とぶつかったり、どちらかが傷つくことを回避したいという反応であった。このカテゴリは「他者への配慮」、「関係悪化回避」、「他者の配慮への遠慮」、「問題回避」から形成されていた。

【利益】は 52 (27.23%) の回答が該当した。このカテゴリは何らかの利益を得るために演技をしたという反応であり、『嫌なこと回避』、『直接的利益』、『良い扱い』から形成されていた。『嫌なこと回避』は嫌な思いをしたくないため演技をしたという反応であり、「嫌なこと回避」、「面倒」、「自己防衛」、「時間の節約」から形成されていた。『直接的利益』は

Table 5 「演技動機」自由記述分類結果

大カテゴリ	中カテゴリ	出現率 (%)	小カテゴリ	反応数
関係維持	集団	18.3	円滑	12
			集団所属	9
			雰囲気の維持	7
			和ませる	4
			楽しくする	3
	規範	11.5	仕事・役割	10
			常識的な気遣い	9
			社会のルール	3
	他者損害回避	11.5	他者への配慮	7
			関係悪化回避	6
他者の配慮への遠慮			5	
利益	嫌なこと回避	14.1	問題回避	4
			嫌なこと回避	11
			面倒	7
			自己防衛	5
	直接的な利益	7.9	時間の節約	4
			就職への利益	7
			学業面での利益	5
	良い扱い	5.2	経済的な利益	3
			他者からの厚遇	8
	関係獲得	印象呈示	14.1	他者からの配慮
良く見せたい				14
悪く見られたくない				5
いい人に見せたい				3
ネガティブさを隠蔽				3
親密化		10.5	高い評価が欲しい	2
			好かれたい	9
			友達が良い	6
			好意があるから	3
			恋人が良い	2
わからない	わからない	3.1	わからない	6
効果的に伝える	効果的に伝える	2.1	効果的に伝える	4
好きでやっている	好きでやっている	1.6	好きでやっている	3

演技をすることによって、直接何らかの利益を得ることができるから演技をしたという反応であり、「就職への利益」、「学業面での利益」、「経済的な利益」から形成されていた。『良い扱い』は他者から良い扱いをされたいから演技をしたという反応であり、「他者からの厚遇」、「他者からの配慮」から形成されていた。

【関係獲得】は47(24.61%)の回答が該当した。このカテゴリは他者と仲良くなったり、良い印象を示したいから演技をしたという反応であり、『印象呈示』、『親密化』から形成されていた。『印象呈示』は良いイメージを相手に示したり、悪いイメージを相手から受けることを避けたいという反応であり、「良く見せたい」、「悪く見られたくない」、「いい人に見せたい」、「ネガティブな自分を見せたくない」、「高い評価が欲しい」から形成されていた。

『親密化』は相手と仲良くなりたいから演技をしたという反応であり、「好かれたい」、「友達が欲しい」、「好意があるから」、「恋人が欲しい」から形成されていた。

【わからない】は演技をした理由が分からないという反応であった。【効果的に伝える】は他者にメッセージを効果的に伝えるために演技をしたという反応であった。【好きでやっている】は演技をすることが楽しいからやっているという反応であった。

場面、行動、効果、動機間の関連

演技場面、演技行動、演技効果、演技動機間の関連を検討するために、数量化Ⅲ類による分析を行った。演技場面、演技行動、演技効果、演技動機のそ

れぞれにおいて、回答率が5%に満たなかった6つの大カテゴリを除き、その他の大カテゴリに該当する記述を行った場合には1、記述がなかった場合には0として数値に変換した。またいずれの大カテゴリにも当てはまる記述がなかった、4つの演技内容は分析から除外した。

結果について解釈可能性から2次元までを採用した(Table 6)。固有値は第1次元は0.60、第2次元は0.54であった。またカテゴリスコア(重み)を図にプロットしたものをFig. 1に示した。第1軸は効果、動機双方の【関係維持】、【関係獲得】など他者について言及した項目が相対的に正の値を示し、【ネガティブ印象】、【利益】、【自己】などの自己に関する言及が相対的に負の値を示しており、演技が自己に関連しているか、他者に関連しているかを表している軸と考えられる。第2軸は【関係獲得】、【ポジティブ印象】など積極的に他者に自己をアピールするような項目が相対的に正の値を示し、【ニュートラル印象】、【関係維持】など自己をアピールするより、周囲と合わせようとする項目が相対的に負の値を示しており、演技によって自己を目立たせようとしているのか、周囲に溶け込ませ、目立たせないようにしているのかを表している軸と考えられる。また特定の他者に対して関係を得ようとして自分をポジティブに見せようとする演技、状況に応じて、関係を維持するために、相手に同調したり、ニュートラルで無難な印象を与えようとする演技、自己や、利益のことを考えて行われる演技の3パターンの存在が示唆された。

Table 6 各カテゴリの数量化得点

		人数	回答率 (%)	第1軸	第2軸
場面	他者	81	42.4	0.37	0.94
	状況	62	32.5	0.29	-1.08
	自己	20	10.5	-2.06	-0.38
行動	同調	67	35.1	0.34	-0.92
	ポジティブ印象	65	34.0	0.16	1.15
	ネガティブ印象	15	7.9	-3.93	-0.46
	ニュートラル印象	15	7.9	0.76	-1.18
	演技の仕方	10	5.2	0.54	1.04
効果	関係維持	69	36.1	0.56	-1.10
	関係獲得	58	30.4	0.47	1.26
	利益	30	15.7	-2.26	0.05
動機	関係維持	73	38.2	0.64	-0.95
	利益	50	26.2	-1.26	0.13
	関係獲得	45	23.6	0.45	1.43

考 察

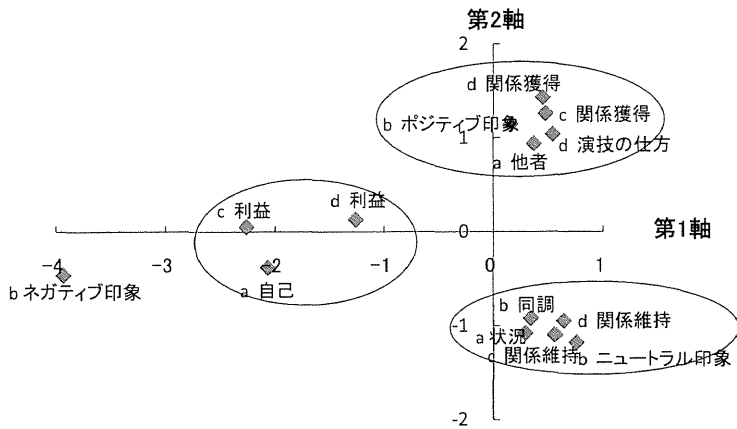
演技の頻度, 必要な理由 演技の頻度, 必要性についてたずねた結果, 自分が演技を行っていると考える者は71.8%, 他者が演技を行っていると考える者は78.8%といずれも7割を越えていた。さらに演技が必要だと考えるものは90.6%であり, 大学生の多くが演技が必要だと考え, 実際に行っていることが明らかとなった。佐久間(2002)は大学生女子の約90%が関係に応じて自分が変化すると考えていることを報告しているが, 本研究でも必要と捉えられている程度では同じ程度であったが, 実際行っていると考える者の割合はやや低下している。この差は変化はしていても演じてはいないと考える者が存在する可能性を示しており, ただ, 変化させるのと, 演じて変化させるのでは異なると考えられる。

必要な理由についての自由記述では, 【他者要因】, 中でも「人間関係円滑化」が多く言及されていた。他の4カテゴリ(「衝突回避」, 「他者への配慮」, 「人間関係保持」, 「状況を盛り上げる」)も含め, 他者との円滑な人間関係の維持のために演技が必要と意識されやすいことが明らかとなった。

演技内容について Goffman(1959)は自己呈示において, 自己を呈示し, 他者に何らかの影響を与えようとする側をパフォーマー, それを受け取る側をオーディエンスとして概念化し, 説明した。KJ法による分類によって明らかとなった演技行動のうち, 【ポジティブ印象】はパフォーマーとして状況を呈示しようとする演技と考えられるが, 【同調】はオーディエンスも使う演技と考えられる。Goffman(1959)以降の自己呈示研究においても,

自己呈示はどう呈示するかが研究対象であるため, 特に印象を呈示しようとししない対人行動についてはあまり検討されていない。今後, 演技について研究を行う際には, 自己呈示と重複する行動を重視するのみではなく, こうした自己の呈示をあまり意識していない行動についても検討する必要があるだろう。

各演技間の関連の調査では, 「特定の他者に対し, 自己を目立たせようとする演技」, 「状況に応じて, 自己を溶け込ませ, 目立たせないようにする演技」, 「自己や利益を意識した比較的自己本位的な演技」の3パターンの演技に解釈された。Arkin(1981)は自己呈示の目的を獲得的(acquisitive), 防衛的(protective)にわけ, 前者を他者からの承認, 賞賛を受けようとする自己呈示行動, 後者を他者からの否認, 非難を避けようとする自己呈示行動としてとらえている。また Baumeistar, Tice & Hutton(1989)は自己の能力を積極的に売り込み, 相手に印象付けようとする自己呈示を自己高揚的の自己呈示, 謙虚に振舞い相手に過大な期待をもたれないようにする自己呈示を自己防衛的の自己呈示と呼んでいる。これら自己呈示の背景として考えられる2種類の動機についての考え方は, 本研究の結果にも当てはまる。つまり自己を目立たせようとする演技は背景に獲得的な動機があり, ポジティブ印象を与えようとする演技が含まれる。一方で自己を溶け込ませようとする演技は, 背景に防衛的な動機があり, ニュートラルな印象を与えようとする演技が含まれると考えられる。そのため今後の研究では, こうした背景に考えられる動機と, 演技の関係について検討する必要があるだろう。



* a:演技場面 b:演技行動 c:演技効果 d:演技動機

Fig. 1 各演技間の関連

まとめ 本研究は日常生活の演技がどの程度行われているのかを明らかにし、同時にその内容について探索的に検討することを目的とした。本研究により、演技は日常生活で多くの者に行われていることが明らかとなった。また大きく3つのパターンの演技に解釈されることが示された。

本研究の限界の一つとして、対象が大学生であったことが挙げられる。演技者を取りまく他者や、状況が異なれば、その演技内容も異なることが当然であり、対象の違いによる演技内容の違いもあるだろう。高校生や社会人などを対象とした場合でも本研究で示されたような3パターンの演技の解釈が可能かについては更なる調査が必要となるだろう。

今後の演技研究においては、こうした日常生活で行われる演技が、演技者や、演技の受け取り手に与える影響について調査する必要があるだろう。自己呈示研究においては、「作戦を使って、人をだしぬく」といったイメージが喚起されてきたと Schlenker (2003) は指摘しているが、同様のイメージは演技にも喚起されやすいと思われる。そのため演技が個人にとってどのように捉えられているのか、それが演技の実行にどのような影響を与えているのかについて検討する事が今後必要となるだろう。

引用文献

- Arkin, R.M. (1981). Self presentation style. In J.M. Tedeschi (Ed), *Impression management theory and social psychological research*. New York: Academic Press. pp. 311-322.
- Baumeister, R.F., Tice, D.M. & Hutton, D.G. (1989). Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of personality*, **57**, 547-579.
- Goffman, E. (1959). *The Presentation of Self in Everyday Life*. (ゴッフマン E. 石黒毅訳 (1974). 行為と演技 誠信書房)
- Renner, K., Enz, S., Friedel, H., Merzbacher, G. & Laux, L. (2008). Doing as if: The histrionic self-presentation style. *Journal of Research in Personality*, **42**, 1303-1322.
- 佐久間路子 (2002). 大学生における関係的自己の可変性の理解：変化理由と変化意識に着目してお茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間文化論叢, **4**, 85-94.
- Schlenker, B.R. (2003). Self Presentation. In M.R. Leary & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of Self and Identity*. New York: Guilford Press, pp492-518.

(受稿 3月23日：受理 4月30日)